教頭会報

栃木県公立小中学校教頭会
発行者　渡　邉　宏
編　集　広　報　部

もくじ

◎巻頭言 …… 1
◎関ブロ茨城大会報告 …… 2
◎第54回県教頭会研究大会 …… 3
研究大会分科会報告 …… 4～17
◎特色ある学校 …… 18
◎地区だより …… 19
◎ひろば・編集後記 …… 20

巻頭言

保護者として思うこと

栃木県ＰＴＡ連合会　会長　渡　邉　宏　幸

「教育の原点は家庭にある」というＰＴＡの理念を最近いろいろな場面で提言している。自分でもその言葉について考えてみた。

私は農業をしていることもあって「食育」に関心を持っている。子育てセミナーでは、以前食育のプロ服部幸應氏を招き講演していただいた。特に印象深かったのが「おふくろの味」という言葉だった。おふくろの味は何か、味噌汁やカレーライス、煮物それぞれの味がある。先日も母に「この豆腐料理うまいね。懐かしい味だね」といったら、「そんな料理かんたん！おいしかったならいつでも作ってやるよ。」こう言ってくれた。まさしくおふくろの味だった。何気ない普通の食事だったがとても幸せなことだ。

今はどうだろう、幼少期からファーストフードや外食が多い。その子たちが大人になった時にはハンバーガーなどがおふくろの味になっていないだろうか。忙しくて手の込んだ料理などなかなか作ってあげられないかもしれないが、簡単でもいい心のこもった一品を食べさせてもらいたいと思う。そしてその食事をできるだけ家族全員でとりたいと思う。

食事を一緒にとるということは、また躾にもつながる。箸の持ち方、食べる姿勢、行儀など、昔はお年寄りに躾けられていたが、今は核家族のため、保護者がよく見てあげないといけない。先日、大学の先生との話の中で食事の話題が出た。「今の大学生は箸をきちんと持てない。だから大学でも教えている。」という。箸の持ち方など家庭の躾、他人に教わるなんて恥ずかしいことだ。でもそのような子がだんだん増えていると聞くと本当に悲しくなる。今の若い人たちは、周りの人に見られるから恥ずかしいなんて思わないのだろうか。確かに昔とは価値観がずいぶん違う。でも、最低限のことは身に着けておかなければならない。「親しき仲にも礼儀あり。」相手の気持ちを不愉快にするということはやってはいけないこと。大人が見本となって子どもたちにもしっかりと教えたいものだ。

私は９年前から小学校の田んぼ授業を行っている。その授業では、田植えが終わった後「さなぶり」をしている。「さなぶり」といっても赤飯を食べお茶を飲むだけだが、子どもたちはその赤飯をおいしそうに食べる。田植え授業が始まった頃は保護者から「子どもがお世話になりました、お赤飯美味しかったと言ってました。」という声を何度かかけられた。最近ではそのようなことがなくなってしまった。子どもたちが親に話をしていないのか、それとも親が無関心なのか、学校の授業だから当たり前と思っているのか、いろいろと考えてしまう。「さなぶり」の赤飯が頭の片隅にでも残っていてくれれば幸いだ。

私たち保護者は、これから変わらなくてはいけない。食育の問題だけではなく、今はスマホの問題もでてきた。生活リズムが崩れ、学校教育にも影響が出ている。なかなかいい対策はないが、今後いろいろと家庭環境の充実を考えていきたい。学校教育・社会教育・家庭教育どれも原点は家庭にあると思う。子どもを思い、今一度親として考え、行動したいと思う。親が変われば子どもも変わる。

関ブロ茨城大会報告

大会に参加して

宇都宮市立豊郷南小学校　大　吉　昌　利

11月10日から２日間、水戸市で開催された関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会茨城大会に参加してきた。１日目は、大阪市立大空小学校を舞台にした「みんなの学校」の上映後、木村泰子元校長先生の講演を聞いた。「公立学校って誰のもの」というステージ上からの問いから始まり、「公立学校の使命は、全ての子の学習権を保障すること」という信念に基づいた学校づくりの話は、自分の知っている学校経営とは全く違うアプローチの仕方であり刺激を受けた。２日目の分科会では、「学力向上」や「学校評価」についての提言発表を聞いた後、各県の先生方と意見を交換し合った。栃木県とは違った工夫を知ることができ勉強になった。30年度は、関ブロも栃木県の開催になる。みんなで力を合わせ、よい大会にしていかなければと思った。

大会に参加して（講演会）

宇都宮市立宝木小学校　新　井　由紀子

映画「みんなの学校」は、大阪市住吉区にある大阪市立大空小学校の2012年度の１年間を追ったドキュメンタリー映画で、木村泰子先生はその初代校長である。2015年に45年間の教職生活にピリオドを打ちご退職され、その後は全国各地で講演活動をされている。

木村校長は、06年初代校長を引き受けた時「公立学校としての役目はいろんな子が安心して通えること。在学している全ての児童の学習権の保障を全職員で目指す」と考えた。校長の信念はぶれない。だからおのずと、みんなとはだれをさし、それぞれがなすべきことが明白になってくる。「児童が『来てよ』のサインを出した時、誰もが関われるように」と木村校長は話し、「支援すべき子は日々変わる」の意識は大空小学校の全職員に貫かれている。だから、職員は全員で児童の情報を共有し道を探る。支援が必要な児童に周囲の子どもたちは逃げずに向き合う。「自分がされて嫌なことはしない、言わない」がルール。自分に何ができるか考えて行動する。保護者は、わが子の入学式に校長から「わが子のみの保護者の立場を捨て、学校全体のサポーターに徹してほしい。」と言われる。地域の人たちは、登下校の安全指導や敷地内の環境整備に進んで関わる。木村校長は「一人のスーパー先生が指導して一つの価値観を与えるより、様々な人が関わることで児童も多様な価値観で育ち、関わる周囲も変わっていく」と言う。それが地域の学校、みんなの学校だと。確かに、特別支援対象の児童が通常クラスで共に学び成長する姿に感動した。

講演の最後「校長の強いリーダーシップは外に向けるもの、校内では常にコーディネーターに徹してほしい、子どもの学びに責任をもって」と力説された。

児童に関わる全ての人たち、そして管理職を目指す人はもちろん、若い教員たちに観て聴いてほしい映画と講演内容であった。

提言を終えて

栃木市立吹上中学校　遠　井　潔之輔

今年度、関ブロ茨城大会に提言者として参加させていただきました。テーマが組織・運営に関することで、参加された先生方の日ごろの業務とオーバーラップする部分が多かったためか、皆さんとても熱心に説明を聞いてくださいました。特に、部活動の再編・適正化に取り組んだ事例については、どの学校にも共通する悩みであるようで、御質問も多くいただきました。グループ協議においても熱心な協議が行われ、各都県の様々な取組も知ることができ、大変有意義な研究大会となりました。

また、事前研修の段階からお世話になった隣県茨城の先生方や、同会場でともに学んだ他都県の先生方の前向きな姿勢や温かいお心遣いには、心を打たれるとともに、自分も頑張らねば、という意欲をかき立てられました。

最後に、今回このような機会をいただいたこと、関係諸機関の皆様に心から感謝申し上げ、報告といたします。ありがとうございました。

第 54 回 県 研 究 大 会

20年後感謝される「育て方」

講師　作家／東洋経済オンラインコラムニスト　ミセス・パンプキン 氏
【特別参加】投資家／『一流の育て方』共著者　ムーギー・キム 氏

『一流の育て方』の著者であるミセス・パンプキン氏とムーギー・キム氏を講師に迎え「将来感謝される家庭教育方針」をテーマに記念講演が開催されました。

両氏によれば、様々な分野でリーダーシップを発揮している大学生やビジネスリーダーたちに「親に感謝している家庭の教育方針」「子育てで重視していること」についてアンケート調査したところ、自由回答形式であるにもかかわらず、両者の回答の内容にはいくつかの共通性があったそうです。

１つめは「主体性」。進路や習い事など自分のことは自分で決める・決めさせる。放任ではなく選択肢を与える。

２つめは「広い視野」。多様な体験を通して視野を広げる・その機会を提供する。特に読書習慣の獲得が大切で、活字に興味を持たせる、常に本がある環境を整える。

３つめは「グリッド」。自分で始めたことは最後までやり遂げる・やり遂げさせる。自分で言い出したことならモチベーションを保つことができる。

他にも、「コミュニケーション能力」「学習習慣」「自制心」「自己肯定感」等も共通性があったそうです。

また、ミセス・パンプキン氏は、他人と違ってもよいことを教える大切さや、親子の信頼関係、親の無償の愛情の大切さについても強調しておられました。

知識基盤社会でますます重要になる「生きる力」。その育成の手がかりとなる貴重な講演でした。

（文責：宇都宮市立雀宮東小学校　加藤　悦宏）

研究大会に参加して（駐車場係）

上三川町立本郷小学校　吉　田　英　晴

駐車場係は、朝７時40分に集合して担当場所及び誘導の手順等を確認し、立て看板の設置や来賓・助言者用の駐車場の点検を行いました。また、管理会社の方と誘導についての打合せを行い、その後駐車場係７名で８時から誘導の仕事を開始しました。一般会員及び来賓の方々の誘導が一段落した後は、来場予定時刻が２通りの助言者の方々の誘導をそれぞれの時間帯で行いました。駐車場係全員の協力で、ほぼ午前中の誘導及び各種表示等の後片付けの仕事を無事終了することができ、駐車場係としての責任を果たすことができました。事務局には、来賓・助言者用駐車場の確保や駐車場係の運営要項の提示、防寒用グッズ等の準備など、駐車場係への心配りに大変感謝しています。ありがとうございました。

グループ協議に参加して

宇都宮市立鬼怒中学校　渡　邉　順　一

第３⑴分科会「施設・設備及び事務に関する課題」では、近い将来に訪れるＩＴ（タブレットＰＣ）等の教育機器の有効活用を４年にわたって研究した発表であり、そのメリットとリスクについての研究発表でした。また、第３⑶分科会「ＰＴＡ及び地域社会に関する課題」は、保護者・地域の協力連携を図り、子どもたちの体験活動を図る研究発表でした。どちらの研究発表からも、校長の助言を得ながら、学校及び関係機関、保護者、地域との調整役としての教頭のリーダーシップが重要な要となっており、まさに縁の下の力持ちとしての教頭の役割の重要性を認識しました。

提案後のグループ協議では、特にミドルリーダーの育成や小中連携、保護者、関係団体などとの具体的な連携について活発に意見交換がされ、有意義な協議になりました。

研究大会分科会報告　豊かな人間性と創造性を育む学校教育

第１Ａ・Ｂ分科会　教育課程に関する課題（小学校・中学校）

助 言 者　栃木県教育委員会事務局学校教育課副主幹　　鈴木　寧子　先生

心豊かで、自ら学び、たくましく生きる児童生徒を目指す小中一貫教育の在り方
－学校間・地域連携の推進と教頭の役割－

提言地区　佐野地区　小中学校教頭会

小学校や地域とのつながりをいかした教育課程の工夫
－教頭職のかかわりについて－

提言地区　宇河地区　中学校副校長・教頭会

１　提言趣旨

⑴　佐野地区小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

「生きる力」を育成していくためには、学校・家庭・地域の連携が重要である。佐野市では、平成25年度より、全中学校区において小中一貫教育の実施に向けた準備を進めている。

そこで、小中一貫教育の推進における教頭の関わりや、本県独自の地域連携教員と教頭の連携などについての研究をとおして、学校間や地域と連携した取組が充実すると考え、本主題を設定した。

イ　研究の概要

推進ブロック（各中学校区）単位の推進会議・研修会や地域教育連絡協議会の実施、小中学生・小学生間の交流の推進、小中学校教員が連携した授業の充実などを行った。また、小中一貫教育推進のための地域連携教員と教頭の役割の整理なども研究した。

ウ　成果と今後の課題

文化祭等の学校行事での相互交流など小中学生の交流を積極的に推進したことや、地域ボランティアなど地域の教育力を積極的に活用したことで、小中一貫教育の活動を充実させることができた。また、小中一貫教育の推進の視点から、地域連携教員と教頭の役割を整理することで、教職員の資質向上につながった。

今後は、学校の実態、地域の実情を踏まえ、校内体制を再確認し、教頭としてどのような関わりが必要なのかを引き続き整理していきたい。

⑵　宇河地区中学校副校長・教頭会

ア　主題設定の趣旨

学校は、地域の教育力を生かしていくことが、また、保護者や地域住民は子どもたちを健全に育成するために自らの教育力を高めていくことが求められる。

このことを踏まえ、研究主題を「小学校や地域とのつながりをいかした教育課程の工夫」、副題を「教頭職のかかわりについて」として研究を進めることにした。

イ　研究の概要

昨年度までの研究を踏まえ、３年次として「地域社会との連携」「地区内小学校との連携」について、新たに見えてきた課題に焦点を当てた。具体的には、小学校との役割分担、継続的な関わり方などを視野に入れた地域社会との連携の在り方やその評価の仕方、小中学校９年間の系統的な教育課程の編成などについて研究した。

ウ　成果と今後の課題

小学校や地域とのつながりをいかした教育課程の工夫を行うには、学校の経営方針だけでなく、学習指導や特別活動等の実践活動を保護者や地域に発信し、地域のひと、もの、ことを積極的に活用することが重要であるとわかった。また、各学校の様々な実践事例を集め、現状を把握し、教頭職の関わりを明らかにしたことで、実践内容の共有化を図ることができ、他の中学校の取組を自校化する意識改革にもつながった。

今後は、他の教育活動との関連を考慮し、より効率的効果的な方法を模索していく必要がある。

2　グループ協議内容

⑴　〔い〕班

○体制づくり

・地域を知るための現職教育等の研修の機会を充実させる。

・教頭は連絡窓口となり、地域連携教員は、実際の推進者として活動する。その際、主体的に取り組めるような意識づくりを行う。

○教頭の役割

・上述の体制づくりの推進者としてリーダーシップを発揮する。

・教職員のモチベーションを上げ、達成感を味わわせることで負担感を軽減させる。

・行事や事業の精査、精選等をリードする。

・連携事業、行事の質を高めるために地域連携教員をサポートする。

⑵　〔お〕班

○小中一貫教育

・一小一中などの小規模校は小中一貫教育が取り組みやすいが、大規模校では難しさがある。

・合同の行事をもつ、学習の約束をつくる等、小小連携の必要性を感じる。

○地域連携

・地域連携教員が学級担任の場合は、その負担が大きく、教頭は地域との関係づくりや組織体制づくり等で、担当者を支えていく必要がある。

○教頭の役割

・教職員が気持ちよく仕事ができる環境づくりを目指して、負担軽減のための全体のマネジメントを行う。

⑶　〔か〕班

○提言Ⅰについて

・佐野地区では地域連携教員の半数は教頭であるが、学級担任が担当である場合は授業中等では対応が難しい。教頭のサポートが不可欠である。

・地域連携を推進する上で会議が多くなりがちであるが、その精選、精査などを行っている佐野地区の取組はたいへん参考になった。

○提言Ⅱについて

・地域と連携した行事等では、実践後すぐの評価は次年度の計画づくりに有効である。

・小中一貫の日を教育課程に組み込んでいる宇都宮市の取組を、是非、次年度に取り入れたい。

・小中一貫を軸に、各校がそれぞれ行っている研修等を一本化できれば、教職員の負担軽減につながるのではないか。

3　指導助言

⑴　はじめに

次期学習指導要領は「社会に開かれた教育課程」「カリキュラム・マネジメント」「学びの地図」「アクティブ・ラーニング」等がキーワードとなっている。その中の「社会に開かれた教育課程」の実現のためには、地域の人的・物的資源の効果的活用、社会教育との連携から、この学校区でどのような子どもたちに育てたいのかを皆で共有し、そこに向けてそれぞれの立場でその役割・責任を果たしていくことが重要となる。

連携の推進には３つのステップがある。まずは情報交換、そして交流を通して心の距離が縮まり、連携へと発展していく。２つの発表は、実に緻密に、戦略的に、確実に実践されていた。ステップを踏んだ小中連携や地域連携が進んでいること、その検証が成果である。

⑵　提言Ⅰについて

〈成　果〉

○目指す児童生徒像の共有

「このような子どもたちに育てたい」という思いや願いを、クリアファイルとして作製するなど、共有しやすくする手立てが講じられていた。

○小中連携による指導案の作成

小中連携の指導案作成とその授業実践はなかなか例がないが、この取組はカリキュラム上での連携もされており、とても良い事例である。

⑶　提言Ⅱについて

〈成　果〉

○評価についての研究

ＰＤＣＡサイクルのＰＤまでは比較的容易であるが、ＣＡとなると難しい。実践後の速やかな学校と地域の双方向的な振り返りは、評価の工夫に視点を当てた実践であり、大きな成果である。

○９年間をつなぐ教育課程の工夫

小中で括れるような大きな枠組みでも明確な視点をもつことで、９年間を見通した教育課程の編成を可能にしている。汎用性、実効性があり他地区でもたいへん参考になる取組である。

（記録：　松本美智代・小口　　誠）

第１　分科会　教育目標・教育理念に関する課題（合同）
第３(2)分科会　教育行財政に関する課題（合同）

助 言 者　栃木県教育委員会事務局学校教育課副主幹　　石島　　直　先生

豊かな人間性・創造性をはぐくむ教育課程を支えるための教頭のかかわり
－確かな学力向上を目指して－

提言地区　下都賀地区Ａブロック小学校教頭会

学校における防災体制の在り方
－学校における防災体制の見直しと改善－

提言地区　宇都宮・上三川地区　小学校副校長会

１　提言趣旨

⑴　下都賀地区
Ａブロック小学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

子供たちを取り巻く環境の変化等、今日の様々な課題に対して、子供たちが主体的に対応する力を育成するために、人間性・創造性を育む教育課程の編成、実施に取り組まなくてはならない。そして、その実現のためには教頭のリーダーシップが欠かせない。学校教育の根幹である学力向上を核に、教頭としてどう関わっていけば良いか研究を進めたいと考え、本主題を設定した。

イ　研究の概要

⑴　学力調査の活用
　①　校内体制作り
　②　授業の改善・充実
⑵資質向上を目指した教職員評価
　・「管理職に期待する関わり」を調査
　・週案反省欄の活用
⑶　小中一貫教育を通して
　①　浸透させるための方策・工夫
　②　「つなぐ」ための具体策

ウ　成果と今後の課題

・校内体制作りや授業改善などに意図的・組織的に取り組めるよう、教頭の積極的な関わりの重要性を再確認できた。教頭が学校経営のビジョンを浸透させ、つなぎ、調整することで、学力向上の取り組みを進める力となった。
・教育課程の実現を通して子供たちに必要な資質・能力を育成するために全ての教職員が意欲的に取り組めるよう、教頭としてどう関わるか。

⑵　宇都宮・上三川地区
小学校副校長会

ア　主題設定の趣旨

自然災害時の防災体制整備は、学校における喫緊の課題であり、児童の登下校時の安全確保についてもなお一層の充実を図ることが必要である。安全に関する環境整備をする上で教育行財政との関係は不可欠であることから、よりよい防災体制を構築するためには、副校長として教育行財政とのかかわりかた（関与の視点）が重要であると考え、本研究主題を設定した。

イ　研究の概要

自然災害における防災体制を見直し、副校長としての教育行財政とのかかわり方について考察した。
・緊急時におけるメール配信システムの活用
・竜巻訓練の実際
・防災無線による災害時情報収集の在り方
・災害時における避難所の設置・運営

ウ　成果と今後の課題

・防災体制に関する内容を洗い出し、副校長の役割とその意義が明確になった。
・副校長と特に関与性の高いものについて、事例を挙げ、行政機関との関与の在り方をまとめ、一般化や改善策を考察することができた。
・自然災害における防災体制の見直しや改善策を加え、現行の体制を再検討することができた。
・自然災害への対策づくりは、学校を取り巻く要因が多様なため一般化が困難であった。
・今後は、近隣の学校同士の連携の在り方についても検討していきたい。

２　グループ協議内容

⑴　協議の柱について

「今日的な課題を乗り越えるために教職員の意識をより高めていくためには、教頭としてどのようにかかわることが必要か」

・校長の考えをわかりやすく職員に伝え、浸透させて、職員全体で共通理解し体制作りをする。
・定期的に行う授業研究会に教頭も加わり、授業力向上を意識付ける。
・教職員評価においては、行動規準表を週案に反映させて活用するアイディアはよいが、教師の負担や多忙感に繋がらないよう配慮が必要だ。
・校長の学校経営方針に合致した個人の達成目標について、達成しやすくなるよう助言する。
・小中一貫教育では９年間の指導を見通し、情報交換が必要である。校長・教頭が授業を参観し、推進委員会などで情報提供すると、より多くの課題が得られる。
・基礎学力の充実について、具体的な方法を小中で連携して工夫するなど、学習指導主任・特別支援教育コーディネーター・小中一貫教育担当・教頭等が連携して対応する。
・小中一貫教育のために、家庭教育への啓蒙として、ＨＰも効果的に活用する。ＨＰ内容については管理職も十分把握しなくてはならない。

⑵　協議の柱について

「安全・安心な学校づくりに向けた、学校における防災体制の在り方と副校長・教頭の役割について」

・緊急時の連絡については、メールが徹底しない場合は、電話連絡網も用意しておくべきだ。
・市町によって対応が異なるが、地域の人に協力を依頼することは迅速な対応に役立つ。
・竜巻の避難場所などは、校舎内に適した場所があるかどうか教頭が点検し、避難訓練を工夫しなくてはならない。また、適切に判断できるよう情報を集めておくべきである。
・防災倉庫整備など、行政との連絡を取り非常時に備えて管理する必要がある。
・緊急時の対応は、マニュアル化したものが実際に機能するよう、教頭からの指示系統を明確にし、防災無線を定期的に点検したり行政と連絡を取ったりするなど、毎年確認すべきである。
・防災教育については、重要性を認識し、例えば津波は本県には起こらないと除外視せず、ＤＶＤ等を活用して指導しておく必要がある。

３　指導助言

⑴　提言Ⅰについて

・学力調査の活用では、今回の研究を生かし、多角的多面的に分析し課題を見つけ教育課程の編成に生かしていくことが必要である。
・全ての教職員が学校の課題を共通理解し、同じ方向に向かって行動するためには、教職員への具体的な支援が大切である。その際は、教頭として職員と意思疎通を図ったり、意見調整を行ったり、協同を支援したりなどが必要とされる。
・教職員の勤務意欲と資質の向上のためには、気軽に相談できる時間を見出すことが求められる。必要な場合には、適切且つ具体的な指導を行っていくことが意欲向上や参画につながる。
・小中一貫教育では、今回の浸透させる、つなぐ、調整するという研究は、具体的で、今後同様の取組を行う場合に非常に参考になる。

⑵　提言Ⅱについて

・安心、安全な防災対策は、学校にとって重要かつ喫緊の課題となっている。
・メール配信システムの活用や配信管理では、日常から様々な場面を想定して対応を考えておくことが大切であり、緊急時の対応の参考になる。
・竜巻の避難訓練は、県内各学校で行われているが、災害から身を守るために必要な訓練である。
・指導資料等を活用した竜巻の避難訓練が実施されているが、今後も継続していってほしい。
・防災無線については、何か違った取組みはできないかを考える参考になる。
・避難所の設置では、初期支援マニュアルの整備・改善が重要になる。
・初期支援の充実には、地域や周辺機関との連携をいかに図っていくかが重要になる。
・緊急時の対応では、日頃の学校間の情報共有が有効な手段となるだろう。
・自然災害は、予測不能であるため、あらゆる状況を想定し、複数の対策に継続して取り組んでいってほしい。

（記録：手束衣代子・中山ゆう子）

第２Ａ・Ｂ分科会　子どもの発達に関する課題（小学校・中学校）

助 言 者　宇都宮市立瑞穂野中学校長　　伊藤　政志　先生

子どもの発達を支援する異校種間の連携の在り方
－異校種間連携における教頭の果たす役割－

提言地区　芳賀地区　芳賀郡市小中学校教頭会

すべての児童生徒にとって魅力ある学校をめざして
－不登校の未然防止に向けた教頭としての取り組み－

提言地区　塩谷地区　さくら市教頭会

１　提言趣旨

⑴　芳賀地区
芳賀郡市小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

「教育ビジョンとちぎ」「児童生徒指導の基本方針」「芳賀の教育」を受けた本地区の学校経営の方向性として「異校種間の連携・交流の推進」があげられる。

その方向性を受け、「子どもの発達を支援する異校種間の連携」に教頭としてどう関わっていったらよいかを主題として研究することとした。

イ　研究の概要

本年度は、３年間の継続研究のうち最終年度にあたる。初年度は異校種間の連携について各学校の教頭が実際にどのように関わっているかを調査分析した。２年目は、調査分析をもとに関与表を作成し、改善策を検討した。

本年度は、昨年度までの改善策をふまえ「複数の小学校から受け入れる中学校との連携」に焦点を当てて研究した。

ウ　成果と今後の課題

教頭の関わりとしての成果は次のようなものがあげられる。

・複数小学校と中学校の連携会議を企画運営することにより、中１ギャップ軽減に繋がった。
・事前アンケートにより児童・保護者の不安解消に役立ち、スムーズな中学進学が実現した。

今後の課題としては、県教委の提唱する「教育の連続性」を実現するべく、幼保小中高と、より長期的視野を見据えた連携に、教頭としてどのように関わっていったらよいかを、地区をあげて取り組んでいかなければならないと考えている。

⑵　塩谷地区
さくら市教頭会

ア　主題設定の趣旨

児童生徒指導上の重要課題として、不登校がある。不登校は、陥ってしまうと学校や学級への復帰が難しい現状が認められることから、未然防止や早期対応が大切になる。そのため、未然防止や魅力ある学校づくりが「鍵」ととらえ、「すべての児童生徒にとって魅力ある学校をめざして」を本地区の研究主題とした。

イ　研究の概要

研究主題に沿って６つの小学校と２つの中学校が次の３の視点で各学校が研究実践に取り組んだ。

⑴「学習支援」の視点から
　・小中連携、学ぶ意欲の向上による学習指導
⑵「特別活動」の視点から
　・望ましい人間関係づくり、自己有用感の育成
⑶「外部連携」の視点から
　・ふれあい学習、ボランティア活動の充実

ウ　成果と今後の課題

教頭の関わりとしての成果は、小中連携によりそれぞれの理解が深まり、小中連携を意識した指導の改善につながったことである。学習の達成感、成就感、学校行事での居がい感、楽しい体験活動の実践化がすべての児童生徒にとって魅力ある学校につながるものと確信できた。

今後の課題としては、学年間の系統性や個人差、各家庭の教育力差を考慮しながら進めていくこと、全職員で同じ目的意識をもつこと、外部との連携における連絡調整に取り組むことと考える。

2　グループ協議内容

⑴　提言Ⅰについて

- 小中連携について教頭が中心になって進めていくのが良かった。
- 一方で小中連携がうまくいかない場合があるが、校長同士で仲良く交流を進めていくことで対応ができる。宇都宮市の場合は教育課程を作成する段階で小学校と中学校で進めていく例もある。地域差はあるが、その差を埋めていくのは教頭であろう。
- 教員同士が顔見知りであること。そのための懇親会や情報交換。地区によっては清掃活動をもとに小学校と中学校が仲良くなり、児童と生徒同士と教員同士が仲良くなるケースがある。
- 芳賀地区は連携は中学校区を元に進めている。就学前の保護者を対象にして連携を進めていくパターンもある。
- 教頭が関与する例として小中の教員が連携を深めていく、連絡を取り合って意思を固めていくことが必要。

⑵　提言Ⅱについて

- ポイントが明確で良かった。さくら市の方では小中連携に力を注いでいるのが分かった。
- 不登校が減少している傾向ではあるが、現状維持であっても小中連携の成果と考えた方がいい。
- 中学生の部活動紹介について、鹿沼西中では中学生が小学校に行って部活動紹介をしている例があったが、参考になった。中学校の生徒会に小学生が参加するという例もあった。
- 学習について勉強が分からないという実態があるが、学力向上アドバイザーを活用するなど、子どもたち一人一人に学力を高めるために個別指導は必要である。しかし、支援の中で学習支援ボランティアの方はなかなかいないという実態。個人情報のかかわりの中で確保することが必要であるが、なかなか進まないのも事実。市の確保においてミーティングで校長、教頭もかかわって支援員の本音を管理職がつかむことによって、プラスの指導ができることを考えていく。
- 教頭のかかわりは各担当の相談を受ける立場でありながら、各担当の方に実践の意義を、人材育成の観点で進めていく必要がある。

3　指導助言

⑴　提言Ⅰについて

- 管理表について、教頭がどのようなねらいをもって分析的に見るのに非常に良いものである。
- 宇都宮市でも校長、教頭、教務主任が集まる会議を設定している。月の第何週に集まるとか、地域性を生かしながら行っている。
- それぞれの先生方が互いの状況を見聞きすること。中学校の先生が小学校の学級崩壊状態にかかわっている状況を見ること。小学校の先生は一人で対応している。中学校の先生が小学校の先生の大変さを知ること。その逆もしかり。小学校から中学校へのぶれない指導が必要である。
- 中学校に入って不登校に入ってしまう傾向がある。小規模校に慣れてしまっている小学生が中学校に行くことでギャップがある。それについての共通理解が必要である。
- 保護者に対するアピール。小学校と中学校は連携しているということ。

⑵　提言Ⅱについて

- 学習支援での成就感、達成感。特別活動においては人間関係作り。活動のねらいを職員会議で伝達し合うことが大切である。
- 外部連携について、しかし、すべてではない。学習支援ボランティアが全てではない。授業のためにどう使うか。ボランティアを使うことで時間がかかったり、マイナスもある。外部に連携するというのは大きな流れではあるが、教員がかかわることはどういうことなのかということを絞ることが必要である。

⑶　最後に

- 内容の濃い３年間のまとめとなるような研究の２つの事例を聞かせていただいた。
- 教頭がかかわると言うことはどういうことか。校長が見えないことを教頭は見えている。校長の意向を教頭に伝えること。
- 要になるのは教頭。学校をどうしたらいいのか、という考えを教頭がもつことが必要である。

（記録：福田　一悦・君島　俊之）

第３⑴分科会　施設・設備及び事務に関する課題（合同）
第３⑶分科会　ＰＴＡ及び地域社会に関する課題（合同）

助 言 者　壬生町立安塚小学校長　　田熊　克己　先生

情報機器を有効に活用するための環境づくり
－タブレットＰＣ等の全校導入を受けて－

提言地区　那須地区　大田原市教頭会【Ｂ】

豊かな人間性をはぐくむ家庭・地域との活力ある連携をめざして
－ＰＴＡとのかかわりを生かした心豊かな生徒の育成－

提言地区　上都賀地区　中学校教頭会

１　提言趣旨

⑴　那須地区
　　大田原市教頭会【Ｂ】

ア　主題設定の趣旨

大田原市は、ＩＣＴを活用した教育を推進しており、３年計画でタブレットＰＣ等を小中学校に整備し、昨年度をもって完了した。

それぞれの学校において様々な工夫や課題が見られる中、先進的にＩＣＴ化の進む本市の教育活動を３年間の年次的推移を比較し検証することで、今後のＩＣＴ化の可能性を探るとともに、教頭としてその環境づくりを研究したいと考え本主題を設定した。

イ　研究の概要

タブレットＰＣを中心とした教育のＩＣＴ化のもたらす成果と課題について、アンケート調査をもとに検証し、俯瞰的考察を試みた。調査項目は

・機器の配置状況とその管理・活用の状況
・機器の管理・活用への教頭としての関わり
・タブレットＰＣをめぐる現状　とした。

ウ　成果と今後の課題

・３年間の実践を経年比較することにより、導入年次の違いによる職員の意識の変容についてある程度明らかにすることができた。
・課題は職員個々のそれから、次第に「チーム学校」としてのものに昇華されていくことが確認できた。全体を総括的・俯瞰的・意図的に差配する「司令塔」としての役割はやはり大きい。
・実質的な学習の効率化、学力の向上に結びついているかについては、より細かな精査・検証が必要である。今後は市内のネットワーク機能をさらに生かしていく試みが必要である。

⑵　上都賀地区
　　中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

生徒が社会性を身に付け、より豊かに学び、生きる力を育むには、学校と家庭や地域との連携は欠かせない。中でも家庭における「社会化の機能」と「心の安定化の機能」は心豊かな生徒を育成する上で、その土台となるものである。

そこで、ＰＴＡとどのように連携を深めていくか、教頭としてどのように関わっていくことが望ましいかという教頭の関与性を考察するため、本主題を設定した。

イ　研究の概要

学校・家庭・地域の三者における関係を、

・学校がＰＴＡをサポートする関係
・ＰＴＡが学校をサポートする関係
・学校とＰＴＡと地域が連携・協働する関係

の三つにまとめ、それぞれの事例を取り上げ、教頭としての関わりについて、分析、考察を行った。

ウ　成果と今後の課題

・学校とＰＴＡの相互連携、地域を含めた三者の協働により、生徒は多くの人と関わり、豊かな人間性を培う機会を得られた。
・教頭は状況に応じて「プランニング」「メンタリング」「コーディネート」「ファシリテーション」の４つの関与を自覚的に行うことが大切だと確認できた。
・より多くの保護者や地域の方とビジョンを共有していくために、家庭や地域との多様な連携の「仕組みづくり」をしていくことが学校に求められる。

２　グループ協議内容

⑴　協議の柱１について

「ＩＣＴが教育活動に及ぼす変化の実相及び可能性、課題の分析」

「教頭として今後のＩＣＴ化に機器管理・連絡調整等でどのように関わるべきか」

・目的を常に意識して使用する必要がある。どういう場面や方法で使うことがその目的を達成できるのか、という研究もさらに必要ではないか。
・学力向上につながっているのか。どんなところに効果があり、課題は何なのか。今後さらに研究を継続して深め、発信してほしい。
・教職員が機器を使いこなすまでの時間も必要である。ＩＣＴ支援員等の配置は、教職員の負担を軽減する意味でうらやましい状況である。
・各自治体において温度差がある。修繕も必要であるとのことなので、教頭として管理面と予算面とのバランスを保つことも大切である。
・教頭として故障したらすぐに修繕する体制を整えなければならない。子ども達が使いたい時に使用できない状況は避けなければならない。

⑵　協議の柱２について

「ＰＴＡとのかかわりを生かした心豊かな生徒の育成のために、副校長・教頭としてどのようにすればよいか」

・小規模校はＰＴＡ単独よりも三者の協働で取り組んでいる場合が多い。地域を巻き込んでの実践ができている。
・ＰＴＡ役員選出については、なり手が見つからず苦労している。教頭は、地域やＰＴＡとの連絡調整に努めたり、情報提供を早めにしたりすることが大切である。また、地域ごとの役員割り当ても児童生徒数の減少に伴い、その原案を改正していく必要もある。
・ＰＴＡ活動に参加する方々が今後もやりたいと思えること、ＰＴＡのＯＧやＯＢの関わりが増えていく、そうしていくことが大切である。
・コミュニティスクール、地域教育協議会等が今後も続いていくように関わりをもっていく。
・ＰＴＡ活動等が、子どもたちにとって非常に有用であることから、子どもたちが地域の方々に感謝の気持ちをもつことができるように声かけをしていくことが大切である。
・学校の教育活動に、地域をどう巻き込むかを考える時期である。地域連携教員と共に地域に出向き、話合いを重視していく関わりをもつ。

３　指導助言

⑴　はじめに

次期学習指導要領の実施に向けて、新たな取組や資料が数多く示されている。現場を任されている我々教職員は、そのエキスを取り入れながら、子ども達や地域のために真に必要なことは何かを見極めながら取り組んでいくことが大切である。今回の研究は、それぞれの地域発展のために大切且つ意義深い研究であった。

⑵　那須地区大田原市【Ｂ】の提言に関して

・大田原市は素晴らしいＩＣＴ環境であり、先進的な実践をしている。
・特に、導入年度による課題の違いや変化を明らかにしていた点と、教頭としての関与について明確にしていた点が素晴らしい。

・今後も先進地として研究を深め、その取組や情報等を県内に発信してほしい。

⑶　上都賀地区の提言に関して

・地域で生きていく子どもたちをどう育てていくか、しっかり考え実践をしている。小規模校の多い地域性を生かした素晴らしい研究であった。それぞれの学校で地域と連携しながら子どもたちを育てていると再確認できた。
・研究の視点が明確であった。学校がＰＴＡをサポートする。ＰＴＡが学校をサポートする。学校、ＰＴＡと地域と連携協力する。という三者の関係を明確にして研究をした点がよかった。
・大規模校と小規模校、両方の事例を扱ったことが、たいへん参考になった。地域とのつながりを深く、太くするという非常に効果的な活動の事例が紹介された。これからも継続推進していただきたいが、教職員の負担になりすぎないよう上手に対応していただきたい。
・教頭の関わり方を４つにまとめ、それを自覚しながら行っている点がとても素晴らしい。
・３年間の研究をまとめられたが、「子どもたちを育てるための地域との連携」という本質を追究した研究であった。

（記録：明澤　伸宏・星　　昌志）

第４Ａ・Ｂ分科会　組織・運営に関する課題（小学校・中学校）

助 言 者　小山市立小山第一小学校長　　横塚　貞一　先生

学校運営の活性化を図るための組織・運営のあり方
－「見える」「わかる」組織・運営に向けた取組－

提言地区　上都賀地区　小学校教頭会

1　提言趣旨

⑴　上都賀地区
　　小学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

教育課題が多様化、複雑化する今日、チームとしての学校の在り方が問われている。教育活動の質を高め、教職員が協働して学校教育目標を達成していくために、教頭はどのように学校組織マネジメントに取り組むか、どのような手法が学校運営を活性化させるのか、そのあり方を探るために本主題を設定した。

イ　研究の概要

学校組織マネジメント上、学校運営の活性化を図るための手法として「シンプル・ビジュアル・シェア」を取り上げ、組織・運営を見直すことを３年間の継続研究とする。

研究３年次の本年度は２年次の地区教頭会での班別協議における事例報告をもとに、研究の成果と課題を確認し、教頭の関与性について実践的なまとめをすることとした。

ウ　成果と今後の課題

「シンプル・ビジュアル・シェア」の手法を意識的・意図的に取り入れることで、個々の教育活動が改善されるとともに、学校全体が「見える」「わかる」ようになり、学校運営の活性化につながることが検証できた。

今後は、まず教頭自身が見通しをもって職務を遂行することを基本に、「見える」「わかる」組織・運営に向けた取組を意図的に継続していくことで、学校運営の更なる活性化が図れるものと考える。

教育効果を高める学校運営活性化のあり方と教頭の役割
－組織マネジメントの考えや手法を生かした学校運営を視点に－

提言地区　下都賀地区Ｂブロック中学校教頭会

⑵　下都賀地区
　　Ｂブロック中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

現在、学校現場では多くの問題が生じ、それらに対する迅速かつ効果的な対応が強いられている。

こうした状況下において、組織マネジメントの考えや手法を生かし、学校組織を効率よく機能させ、学校運営を活性化していくための方策を検討・実践し、教頭としてどのようなはたらきかけができるかを考察するため、本主題を設定した。

イ　研究の概要

学校運営活性化のキーワードを、「組織力向上」、「教職員の意識向上」、「人材育成」ととらえ、３年間の継続研究とした。

本研究では、学校評価を基にしたＰ・Ｄ・Ｃ・Ａ各場面での教頭のかかわり、教職員評価制度を基にした教職員の人材育成、勤務意欲向上に向けての教頭のかかわりについて、実践事例を取り上げ、分析・考察を行った。

ウ　成果と今後の課題

学校評価に基づく課題の解決や教職員評価を生かした人材育成における教頭のかかわりや役割が明確になり、学校運営を活性化するには、教頭のリーダーシップや総合的なマネジメント力が必要であることを再認識することができた。

今後は、教頭のかかわりが適切であったかどうか、客観的に評価し改善を図るとともに、喫緊の課題である人材育成に向けて、多忙な校務の中で教職員を効果的に育てるＯＪＴの在り方などについても研修を積む必要がある。

２　グループ協議内容

⑴　提言Ⅰについて

・教頭運行計画表の良さを痛感した。班の中には、学校沿革史に教頭運行計画の欄を付けたという学校もあった。教頭の職務について他の職員と共有することが望ましい。また、大きな行事については、全体の計画と共に細かな運行表もあるとよいという意見もあった。〔あ班〕

・キーワード「シンプル」「ビジュアル」「シェア」について「見える」化が進められていた。Ａ３一枚の教頭運行計画表があれば、先の見通しをもって職務を進めることができる。また、新任や異動した場合、赴任校独自の行事やＰＴＡ等に関わる教頭の職務が行いやすくなる。特に中学校ではＰＴＡとの関わりが限られるので、異動の際に有効であろう。教頭の職務を「見える」化することで、職員の学校経営参画意識も高めることができる。〔お班〕

・実践事例の中にも示されていたタイムマネジメントの有効性についての話題が出た。班の中には、職員会議の時に所要時間を記入することで提案者も時間を意識した発表になり、会議のスリム化が図れているという学校があった。〔か班〕

⑵　提言Ⅱについて

・校長の経営方針を反映させられるようにすることが、教頭の大切な責務である。〔あ班〕

・教職員が地域へ出ることを重点化した結果、学校評価が好転したという点や学校評価を分析することで、学校運営を改善したり、校長の思いを教職員に浸透させていったという点で素晴らしい発表であった。３年前から遡って学校経営を見直したことにも敬意を表したい。学校評価は、ＰＤＣＡのＣをどう生かすかという点がポイントである。各校でいろいろな工夫をして、反省をしっかり次へ生かせるようにしていく必要がある。〔う班〕

・ＰＤＣＡのサイクルの中で、Ｐの段階の抜けがないように教頭がかかわることが必要であろう。〔え班〕

・学校評価を行うこと自体が目的にならないようにしたい。保護者・教職員・生徒を関連させたアンケート項目を設定することは大切だと思う。さらに、目に見える形で現れた評価内容を次年度に生かしていく必要がある。〔き班〕

３　指導助言

⑴　提言Ⅰについて

・教頭の最大の職務は校長の意を体して学校教育目標の具現化にリーダーシップを発揮することである。そのための道筋を明らかにする取組が数多く示された。まずは教頭自身が見通しをもつということであり、事例はどの学校においても参考となることばかりであった。

・特に人材育成はとても大きな課題である。それは学校運営の核であるとも言える。優れた理念があっても日々の実践は欠かせない。最も人を動かす影響力は教頭の「人間性」であり、次が「専門性」である。組織や教職員、授業が活性化した場合の目指すべき姿を具体的にイメージして教職員を育ててほしい。

⑵　提言Ⅱについて

・学校活性化のキーワードを「組織力向上」、「教職員の意欲向上」、「人材育成」ととらえたことに同感する。これらのキーワードは、密接に関わっていることを確認できた。

・「組織力向上」では、学校評価を有効活用して、教職員の学校経営参画を高める機会にしたい。行動の共有までできるとよい。

・「教職員の意欲向上」では、日常の声かけや励まし、承認・賞賛、見ているというサインを示すことをしっかりやっていくことで効果を上げることができることを確認できた。

・「人材育成」では、『教育は人なり』のとおり、教職員の力量アップが教育の成否を決める。ミドルリーダーの育成にも努めてほしい。

⑶　「職員室の担任」として

・活気がある学校は職員室に活気がある。
・職員のやる気を引き出す姿勢、信念を示すこと。
・目標はシンプルに、子供の姿で示すこと。
・評価は資質能力の向上と活性化のためにする。
・担任も気づかない子供の頑張りを担任に知らせることが信頼感につながる。

（記録：杉浦　昭博・椎名　　聡）

第５Ａ・Ｂ分科会　教職員の専門性に関する課題（小学校・中学校）

助 言 者　宇都宮市立陽南中学校長　　髙橋　哲也　先生

教師の「力」を高めるための教頭のかかわり
－「指導力」「意欲」「協働」の高まりについて－

提言地区　宇都宮・上三川地区　小学校副校長会

教職員の資質向上を目指して
－学校の組織力を高めるミドルリーダーの育成－

提言地区　足利地区　小中学校教頭会

１　提言趣旨

⑴　宇都宮市・上三川地区　小学校副校長会

ア　主題設定の趣旨

「栃木県教育振興基本計画2020」が策定され、教育環境づくりとして、教員の資質・能力の向上が取り上げられた。ミドルリーダーや若手教員の資質や能力を向上させるためには、学校が組織的に取り組む必要がある。そこで、教師一人一人がもつ力を組織的に高めるために、教頭としてどのように関わるべきかを明確にしたいと考え主題を設定した。

イ　研究の概要

教師の「力」として、「指導力」「意欲」「協働」の３つに焦点化し、それらを高めるための教頭の役割を各校の取り組みをもとに研究を重ねた。「指導力」については一校だけの校内研修の枠を超えた「学び合う教師集団」と「プロジェクトチーム」という実践から、「意欲」は「５つの重点公約」と「人が集う環境設定」との実践から、そして、「協働」については「学校内組織の協働」と「地域の組織との協働」の実践から迫った。

ウ　成果と今後の課題

「指導力」を高める鍵は、学び合う教師集団の構築にある。「意欲」の向上を図る鍵は、子どもたちの成長を教職員・児童・保護者が共有できる場を設定・管理・運営することにある。また、「協働性」を高める鍵は、組織の活性化・情報共有・地域の教育力の活用にあるとの結論に達した。多様化する学校が直面する課題に組織的に対応するため教頭としての役割を再確認する必要がある。

⑵　足利地区　小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

教職員の年齢構成にアンバランスが生じている中、ミドルリーダーの育成が急務である。次世代を担う中間層世代の資質・能力向上のために、教職員を指導する立場にある教頭がどのように関わるべきかについて研究・実践することをねらいとし、主題を設定した。

イ　研究の概要

各学校における現状と課題を踏まえミドルリーダーに必要な資質や能力を明確にした。次にそれらを効果的に育成できる場面や方法（視点）を考え、各学校の実態に応じた具体的な実践を積み重ねた。その際「人間関係（信頼関係）づくり」を基盤とした「教頭としての４関与」（知的関与、情的関与、働的関与、物的関与）を確認し学校の組織力を高めるミドルリーダーの育成を目指した。

ウ　成果と今後の課題

多様な手法でミドルリーダーの育成が行われた結果、期待される教職員の中で自分の役割を自覚し学校全体の動きや教職員の様子を掌握していこうとする意識が少しずつ育ってきている。

研究を進めていく中で、次期ミドルリーダーと教頭との関わりの大切さがあげられた。共に職務を遂行する中で、短・長期的な課題を一緒に考え目標を設定していくことは、学校経営参画への意欲を高めるために大変重要である。さらにミドルリーダーとしての自覚や資質向上のためにも市や県の研修を有効に活用していきたい。

2　グループ協議内容

⑴　〔あ〕班

・「学び合う教師集団（地域学校園）」で学校や小中学校合同で行う研修が効果的である。
・プロジェクトチームの取組を行いたいが、中堅教員が少ない。若手とベテラン層を組ませるメンター制は効果的である。その際、ベテランへの声かけでモチベーションを上げていくことも大切である。
・年齢にとらわれずに、指導力のある教員が若手を育て見守る体制づくりが重要である。
・教務はミドルリーダーの典型、立場で育てることも大切である。
・教職員評価制度を活用し、当初面談でミドルリーダーへの課題を出し、同じベクトルをもって職務にあたるようにする。

⑵　〔え〕班

・小規模校では、若手育成に重点がおかれている。教務、学習指導、児童指導等各主任とのメンター制で指導力向上を図っている。
・宇都宮市内では、若手教員サポート事業として２～４年目教員と中堅教員とでメンター制をとっている。
・協働しほめて育てることは若手の指導力向上だけでなく、ベテランの意識向上につながる。
・若手教員が多いため、学年主任やベテラン教員とだけでなく、特別支援教育担当者や養護教諭、市の支援員や相談員をプラスして研修していくことも重要である。
・若手の勉強会に加え、ミドルリーダーの勉強会も校長、教頭が行い、成果をあげている。
・公開授業も多く、教員全体の意欲がある学校では、教頭は特にメンタル面や体力面などへのフォローを必ず行うように心がける。

⑶　〔き〕班

・教頭としてよりよい人間関係を築いていくための立ち位置がむずかしい。
・日頃から専門性も考慮に入れたメンター制を心がけることが大切である。
・学年会やミニ職員研修を行うことで若手、中堅、ベテランとの共通理解を深め専門性を高める。
・大変参考になったが、教頭の４関与のうち、物的関与（金銭面）が一番問題である。
・学校を異動すると、教職員だけでなく、地域も変わるので、教頭として早く適応していくことが中堅や若手の育成にもつながっていく。

3　指導助言

⑴　提言Ⅰについて

・「指導力」を学び合う集団作りと捉え、地域学校園（小中連携）から、資質・能力の向上を図っている。地域学校園として、研究課題が明確になっているので、先生方の意識も高くなる。
・指導力向上の取組で大切なことは、教職員のニーズがあるかどうか、学校課題の改善につながるかどうかを見極めながら進めていくこと、前例踏襲では繋がらない。必要性を共有し、教師が主体的に学んでいくことが大切となる。
・学校組織が機能するためには、コミュニケーションが不可欠となる。
・「協働」とは、組織的戦略的に取り組むことである。「チーム学校」という考え方で、学校全体の教育力・指導力を高めることを通して個々の教員の指導力を高めていることが参考となる。

⑵　提言Ⅱについて

・ミドルリーダーにあたる年代の教員が少ないのが現状である。誰を対象にどのように育てていくか明確なビジョンをもつ必要がある。
・先生方の持ち味を発揮できる場を通して、資質・能力を高めるために４つの関与の視点を明確にしたところが他地区の参考になる。
・50代の教員をどうするかが課題である。眠れる50代の活用として、ミドルリーダーの育成にプロジェクトチームの核として関わってもらうことも有効である。
・学校規模や構成メンバーで違ってくる等難しいことではあるが、欠かせないことであるので、４つの観点を念頭に意識してかかわってほしい。

⑶　最後に

平成24年度の中教審答申では、教職生活の全体を通じての資質・能力の総合的な向上方策について示された。教員は、探究心が不可欠であり、学び続ける姿勢が必要である。学校が組織的かつ適切にかかわり、教員の資質・能力を高めるためには、教頭のリーダーシップが不可欠である。

これからの教育の方向性に対応する教員をしっかりと育てていくことが、管理職の役目である。

（記録：鈴木ヒロ子・丸山美江子）

第６Ａ・Ｂ分科会　副校長・教頭の職務に関する課題（小学校・中学校）

助 言 者　さくら市立氏家小学校長　　橋本　啓二　先生

リーダーを育て、組織力を高めるための教頭の関与の在り方

－学校と地域・学校間の連携・協力を図る取組をとおして－

提言地区　南那須地区　南那須小中学校教頭会

小中連携における教頭の果たすべき役割

－更なる地域連携の視点を生かして－

提言地区　那須地区　那須町教頭会

１　提言趣旨

⑴　南那須地区

南那須小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

多様化、複雑化した課題への対応のため、地域や学校間の連携・協力が欠かせない。そのためには、学校間や地域等外部との間を取り持つコーディネート力を行事等の主務者も身につけ、中心となって校務に携わることが求められる。そこで、外部との連携・協力の在り方について教頭がどのように関与し、職務を機能させるかについて研究を行った。

イ　研究の概要

平成26年度からの研究の３年次に当たる今年度は、地域にある教育資源を生かした連携推進事業と小中連携・一貫教育の推進事業の中から、教頭が積極的に関与し、主務者が主体となってコーディネート力を発揮して組織的に取り組んだ事例を検証することによって、教頭の関与の在り方を研究し、その重点を整理してまとめた。

ウ　成果と今後の課題

本研究の成果としては、主務者とともに外部との連携・協力を維持・向上させることで、連絡・調整が円滑になった。また、複数校が共同で事業を実施することで、校内体制が整ったり、評価・改善について話し合う機会が増えたりした。さらに、教頭自身の強みを主務者と共有し、協働しながら持続可能な学習活動としての定着ができた。

課題としては、事業を取捨選択しながら連携協力を継続し、教頭として組織を動かすリーダーを育てるとともに、地域の中でより効果的な活動を構築する力に磨きをかけていくことがあげられる。

⑵　那須地区

那須町教頭会

ア　主題設定の趣旨

那須町は、ほとんどの学校が小規模校であり、小規模校ならではの様々な問題を抱えている。また、統合による適正配置が進んでおり統合校に対する地域や保護者の思いが希薄になってしまうことが懸念されている。そこで、小中連携に関する教頭職として何をなすべきか、また、どんな課題があるのかを把握し、教頭としての職務遂行能力の向上に向けた研究を行うこととした。

イ　研究の概要

平成27年度の研究の成果と課題を踏まえ、小中連携の実践状況と、地域連携の視点を生かした教頭としての取組を確認した。また、小中連携を進めるための教頭としての役割を踏まえ、校長の補佐役、教職員の組織化、教職員の意識改革等の内容をもとに、研究としてのまとめを行うこととした。

ウ　成果と今後の課題

小中連携における共通指導事項が明らかにされたことで、９年間を見据えた教育の重要さや意義について教職員が考え、実践意欲が高まった。また、小小交流や小中交流に指導の一貫性が生まれ中１ギャップの解消になっている。

将来的に目指している学校の姿がコミュニティスクールにあるのであれば、小中連携と地域連携は関連付けて考えていく必要がある。今後は、学校・家庭・地域が一体となって教育を推進していく全体構図を捉え、教頭の立場でこれからどのように対応して行くかを考えていく必要がある。

２　グループ協議内容

⑴　協議の柱Ⅰについて

・地域連携教員、教頭、教務主任の仕事の棲み分けが難しい場合があるので、効果的に働くように明確化できるとよい。
・１校に一人地域コーディネーターが配属されている学校もあり効果が出ている。
・地域ボランティアの活躍等で学校が地域をつくる、地域と共に歩むという機運が大切。
・地域との最初のコンタクトは教頭が、その後は主任クラスという順で中堅を育てる。
・地域の成熟度とも関係するが、ボランティアの得意分野や思いと学校の必要性とのギャップを埋めることがカギとなる。
・地域連携教員や地域コーディネーターの質の向上を図り、役割の明確化を図れるとよい。
・ボランティアの控室等の場所の確保、行事や事業等への予算の確保が課題である。
・リーダーの育成については、校内委員会等を利用して指導・助言を行うことができる。
・ＯＪＴ形式でリーダーを育てている。
・自治会や公民館を巻き込んだ活動を行って地域連携を推進している。

⑵　協議の柱Ⅱについて

・宇都宮市の地域学校園の取組が組織化されており参考になる。
・小中の授業交流を定期的に実施するなど小中連携がかなり進んでいる学校区がある。
・立地条件がよく小中乗り入れの授業を行って効果をあげている学校がある。
・小中連携だよりなどを発行して啓発を図っている。
・統合の促進に伴い、複数小学校で中学校の授業や行事を行う取組がある。
・小中一貫のための話し合いを行い、目指す児童生徒像を構築する方法がある。
・長期休業中に不登校等の話し合いを持つこと等が中１ギャップの解消の一助となる。
・ノーメディアデーや「早寝・早起き・朝ごはん」を小中で共通理解の上指導している。
・行事を小中で調整し、委員会活動やＰＴＡ活動、情報交換等の行事を連携して行う。
・今後の教育の動向を見据えて小中連携は一層推進していく必要がある。教育課程においても小中連携という視点で編成していくことも視野に入れられるとよい。

３　指導助言

⑴　南那須小中学校教頭会の提言について

・指導助言する立場として、いち早く地域に精通することが大切である。
・学校規模・組織体制によって違いがあるが、地域連携事業における主務者の立ち位置を明確にすることが重要である。
・地域連携事業における教職員の意識高揚を図るために職員研修や授業公開を実施し教職員の意識改革を図る。

・教務主任、地域連携教員、コーディネーターとの関わりの中で自らの資質向上が必要である。
・那須烏山市では、市教委と連携を取った推進体制ができており素晴らしい。

⑵　那須町教頭会の提言について

・小中連携を推進するにあたっては、小学校と中学校では温度差があるのでねらいや実施方法について理解と共通行動がとれるようにしたい。
・教職員の意識高揚、不登校減少、学力向上など小中連携の具体的な成果が数値で現れることによって更に意欲が高まっていくと考えられる。
・那須町の小中連携は素晴らしい取組であるが、ＰＤＣＡをしっかり行い、教職員の過重負担にならないようにする必要がある。
・将来を見据えた町行政の考えのもとに、まずは足下をしっかり固めて地道に進めていくことが大切である。

⑶　管理職として

・地域連携や小中連携など学校経営を時代に沿って対応させていくために「先見性」や「積極性と情熱」「みずみずしい感性」が求められる。
・創造的リーダーシップを発揮することが大切である。要望性、共感性、通意性、信頼性など管理職自身が資質を高める。
・管理職は常に「信頼性」を基盤に教職員に接して教師力の向上にあたる。そのために仕事を通して結果を求める姿勢が重要である。率先垂範と「任せて信じて問われるまで待つ」の折り合いをうまく付けることが大切である。

（記録：星　　紀子・石田　　弘）

「小規模校のよさ」を生かした特色ある学校づくり

栃木市立大宮南小学校　齋　藤　初　代

本校は、明治８年創立の歴史と伝統をもつ学校で、栃木市南東部の農村地帯に位置しています。児童数の減少に伴い、平成24年度から小規模特認校として積極的に特色ある学校経営を推進し、特に小規模校の特色を生かしたきめ細かな教育と将来の集団生活においても積極的に人と関わりよりよい人間関係を築けるよう、コミュニケーション能力の育成に努めています。現在では67名の全校児童のうち23名（約３割）の児童が他学区から通学しています。

きめ細かな指導として、時間割を工夫しＴＴ体制での指導の充実を図ると共に「朝の学びタイム」や「放課後教室」を年間通じて実施したり、「漢字検定」等の各種検定制度も活用したりして基礎学力の定着を図っています。コミュニケーション能力の育成においては、週に１回全校集会を持ち異年齢で様々なテーマによる話し合い活動をする機会を多く設けています。この活動は、上級生にはリーダーシップを下級生にはフォロアーシップを培う上でも大いに成果を上げています。その他、話すプロに学ぶ授業、外国語活動を通しての交流、地域のボランティアさんとの連携による伝統文化こども教室「大南ひまわりこども教室」など様々な取組によって、コミュニケーションの機会、質を高めています。

集会での話し合い活動

夏になると、本校の敷地には「ひまわりのような笑顔いっぱいの学校にしよう」と、全校生で育てた２千本あまりのひまわりが大輪の花を咲かせます。今後も小規模のよさを生かした「魅力ある学校」を目指していきたいと思います。

震災を経験して

高根沢町立阿久津小学校　齋　藤　能　光

本校は、東日本大震災により校舎が傾き、隣の西小学校で授業をしたり、運動会は阿久津中学校のグランドで行ったり、入学式や卒業式は町民ホールで行うなど不便な生活を強いられました。震災の３年後に新校舎が完成し、５年後にプールが完成しました。

新校舎は、児童が思い出に残るとした時計塔をイメージして建てられた見はらしタワーや、旧校舎のガラスを再利用したメモリアルホール、地域住民が避難できる多目的ルーム、約2,500食分の非常食等を保管している備蓄倉庫、屋上緑化システムなどを備えた立派な校舎に生まれ変わりました。本校の復興に向けては、町・町教委・教職員の並々ならぬ苦労があったと聞きました。震災時に在職した教職員は５名だけになり、当時の苦労や復興の熱い思いを知らない保護者や教職員が多くなってきました。「新しい校舎でいいですね。」と異口同音で、初めて訪れる方は私に話しかけてきます。しかし私は、当時の被害状況と復興経過、町・町教委・教職員の復興への努力を紹介しています。ニュースからは、全国各地で災害が起こっていることがわかります。災害はいつどこで起こるかわかりません。私は、地域全体の防災意識を高めるためにも、本校を訪れる方にこのことを伝え続けていきたいと思います。

共に支え合い、学び続ける教頭会をめざして

上都賀地区公立小中学校教頭会長　黒　澤　　守

上都賀地区小中学校教頭会は、鹿沼市・日光市の小学校53校、中学校26校の教頭79名で組織されています。教頭会本部役員は、２市町の輪番制により選出されます。さらに、研究部と調査部の２つの専門部を置いて、各市から選出された部員を中心に活動しています。

研修会は５月、11月、２月の年３回開催しています。５月は総会及び上都賀教育事務所の先生方の講話、11月は、外部講師による講話、そして、２月は、上都賀教育事務所の先生方の講話の後、班別協議を行い研修を深めています。11月の研修会では、弁護士の阪口　勉さんをお招きして、「数々の事例を通して、今、学校現場に伝えたいこと」という演題で講話をいただき、貴重なお話の中に、学校安全・安心の中核を担う教頭としての在り方を改めて深く学ぶことができました。また、２月の分科会では、研究部より出されたテーマについて、各学校の実践事例を持ち寄り、６～７名程度の少人数グループでの協議をしています。上都賀地区は大規模校から極小規模校まであり、紹介される事例は様々で、どの学校におかれても、地域に根ざした特色ある教育活動の実現に努力しており、互いに学び合うよい機会となっています。

今年度は、第10期　全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」の３年次にあたり、11月に行われた研究大会では、小学校は、組織運営に関する課題「学校運営の活性化を図るための組織・運営のあり方」について、中学校では、ＰＴＡ及び地域社会に関する課題「豊かな人間性をはぐくむ家庭・地域との活力ある連携をめざして」について、今まで研究してきた成果を発表しました。

今後も、上都賀地区の子供たちのために、79名、共に支え合い、学び続ける教頭会をめざし、日々努力を重ねていきたいと思います。

創造的な教頭会を目指して

足利市立小中学校教頭会長　町　田　敏　夫

足利市立小中学校教頭会は、市内の小学校22校、中学校11校の教頭33名で組織されています。会員相互の研修と親睦を図り、教頭の資質の向上と学校教育の振興を図ることを会の目的としています。

研修会を年５回実施しています。研修会の形態は、前半全体会、後半分科会になります。後半の分科会では、小学校、中学校に分かれて（小学校はさらに東西南北のブロックに分かれる）のディスカッション、中学校区ごとに分かれてのディスカッションの２つの形態を交互に行っています。各学校の実情、事例などをもとに毎回活発な意見が交わされ、情報を共有することができ、大変有意義な研修会となっています。

毎年６月に実施している研修部主催の研修会では、ここ数年、市内の民間企業の経営者を招き、講演をしていただいております。若手教員の育成と若手社員の育成は相通ずるところがあり、教頭として広い視野をもつことができると考えています。今年度は、株式会社「板通」社長板橋信行様から、「管理職としての心構え・人材育成等」の講話をいただきました。「これから必要となるのは、ダイバーシティ時代のリーダーであり、多様性とバランス感覚が求められている。最近の新卒者はＩＴ、モバイルの知識、技能が身に付いているが、打たれ弱い。上司も命令型からコーチング型へと意識を変え、良いものを生かすという視点が大切である。」という話が印象に残りました。

11月の県の研究大会では、第５Ｂ分科会「教職員の専門性に関する課題」で、研究を続けてきた「教職員の資質向上を目指して～学校の組織力を高めるミドルリーダーの育成～」の発表を行いました。中心的に役割を担っていただいた先生方には、大変なご苦労をいただきました。足利の教頭先生方の力を集結でき、期待通りの成果をあげることができたと思いました。

ひ　ろ　ば

次の世代へのバトンタッチ

上三川町立明治中学校　荒　川　幸　広

本校では、キャリア教育の一環として、毎年９月に様々な職業に就いている方を中学校に招いて、特別授業を行っています。生徒は、自分自身で選択した授業を受けることになりますが、ちなみに、今年度は、「お笑い芸人」「訪問看護師」「調理師」「広告制作会社社長」「在宅介護士」等15人が講師として授業を行いました。テーマは、「お笑いのツッコミから学ぶこと」「命」等それぞれですが、どれも講師の方の思いや「生徒へのメッセージ」が伝わってくる授業でした。授業後、講師の一人が「私たちは、先生方と違って、次の世代を生きる子どもたちに、自分の価値観や考え方を話す機会がありません。こうした機会をいただけて本当にありがたいです。」と話してくれました。普段あまり気にもしていませんでしたが、まさしく我々教員は、『次の世代へのバトンタッチ』の最前線にいるわけです。それでは、変化の激しい時代を生き抜かなければならない子どもたちに我々教員は何ができるのか。そのひとつは、地域や社会の人材を上手に取り入れ、子どもたちに様々な価値観や考え方があることを知ってもらうことでしょう。そうした取組により、ひとつの価値にとらわれない多面的なものの見方ができるようになります。それは、不確実性を積極的に受け入れ、先の見えない時代に挑戦するための大きな武器になるはずです。

学級通信の思い出

大田原市立宇田川小学校　宇都野　純　子

先日、中間面談での話題から、毎週学級通信を出していた担任時代を思い出しました。その夜、全40号を一気に読み返しました。課題の多いクラスとの前年度からの申し送りだったので、４月当初は、毎朝気合いを入れて教室に入っていったことを思い出しました。そして、保護者とともに子どもたちを良くしよう、そのためには、まず子どもたちの様子を知ってもらおうと出し始めたのがこの学級通信でした。毎週Ａ４サイズ１枚に子どもたちの様子を書く中で、時には褒めたり、時には問題が起こって自分の思いを伝えるとともに保護者にも考えてもらったりと、学級の様子を伝え続けた一年間でした。保護者の温かい言葉と、課題を徐々に克服していく子どもたちの姿がうれしくて、大変さなんてどこかに吹き飛び、やりがいを感じていったことを昨日のことのように思い出しました。

今回の面談で、「子どもの良いところを保護者に伝えられていない。」と話した先生には、次の日にこの学級通信を渡しました。社会を取り巻く環境の変化が大きく、様々な対応が求められる大変な時代ですが、子どもや保護者と真剣に関わることで得られる感動は教師冥利に尽きます。この感動を、日々頑張っている先生たちが一人でも多く味わってほしい…そう思った夜でした。

幸せの贈り物

那珂川町立小川小学校　星　　紀　子

12月になると思い出す話がある。活字嫌いの私も星新一氏の本はよく読んだ。鋭い感性が淡々とした文章で表現され、時にシニカルで、オチも見事な星氏の作品の中で異色（と私が思う）の話がそれである。

クリスマス・イブに、あるパッとしない青年のもとにサンタが現れ、彼だけの望みを何でも叶えるという。彼は迷い、その権利を、気にかけていた人に譲る。それをサンタから聞いた譲られた人は、心が温かくなり、気にかけていた人に譲り、サンタが次々に譲られた人を巡って…というストーリーである。

この中で、サンタから本当によい贈り物を得たのは誰か。誰かのために何かをして喜ばれ、いい気持ちになるというのは、何ものにも替えがたい喜びである。それが実感できる機会は多いようでそうでもない。また、自ら考えてそうしたというところにも意味がある。

自らの幸福を求め、自分の境遇に腹を立てたり人の批判をしたり自分の欲望を満たそうと形振り構わず行動したりというのを見聞きすると、幸せって何だろうと思う。自然と暮らす質素な羊飼いが「たくさん持っているのは何も持っていないのと同じさ。ますます欲しくなるからね。」と言っていた。幸せを実感できる贈り物を子どもたちに贈りたいと思う今日この頃である。

編集後記

今回の会報は、第54回研究大会の報告が中心です。「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」の主題のもと取り組んできた実践研究の概要及び大会の様子を概観することができる内容となっております。分科会につきましては、紙面の都合上、会場ごとに２ページの掲載とさせていただいておりますので、協議内容の詳細を皆様にお届けすることはかないませんが、それぞれの分科会の「主題設定の主旨、研究の概要、成果と今後の課題」などをお読みいただくことで、本年度の取組が、会員の皆様の日々の実践に結びついてくれたらと願っております。（束原）